

宇野浩二  
葛西善藏

牧野信一集

29

現代文学大系



宇野浩二  
葛西善藏集  
牧野信一

现代文学大系 29



筑摩書房

現代文学大系 29

宇野浩二 牧野信一 集  
葛西善藏

昭和四十二年七月十日第一刷発行

著 者

宇野浩二 牧野信一  
葛西善藏

発行者

竹之内静雄

発行所

株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
電話東京二九一―七六五一（代表）  
振替東京四一二三

装 幀

真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社  
表紙クロス 東洋クロス株式会社  
本文整版 株式会社精興社  
本文印刷 株式会社精興社  
製本 株式会社鈴木製本所

宇野浩二集 目次

思ひ川

五

子を貸し屋

一〇

枯野の夢

一五

子の来歴

二〇

夢の通ひ路

二六

葛西善藏集 目次

哀しき父

二五

子をつれて

二九

馬糞石

二六

椎の若葉

二六

湖畔手記

三〇

醉狂者の独白

三二

牧野信一集 目次

父を売る子

三六

村のストア派

三七

ゼーロン

三七

鬼涙村

三八

痴日

四〇

裸虫抄

四一

淡雪

四二

年譜

四三

人と文学

白井吉見

四三

宇野浩二集

根氣だ根  
氣だ唯こ  
れだけだ

宇野浩二

## 思ひ川

(あるひは 夢みるやうな恋)

おもひ川ながるる水のあわさへも  
うたかたびとにあはできえめや 『伊勢物語』

## 一

大正十二年は、九月一日に、関東地方に、稀な大地震のあつた年である。

その大正十二年の一月の中頃のある晩、牧新市は、その一二年ほど前から急に妙にしたしくなつた仲木直吉に誘はれて連れて行かれたことのある、茶屋に行つた。

その茶屋は、仲木がそのころ住んでゐた家から、あまり遠くないところにあつた。

その晩、仲木は、その茶屋の座敷に坐ると、半分ひとり言のやうに、「今日は、前に一ぺん呼んだことがあるんだが、三重次といふのをかけてみようか、」と云つた。

やがて、その三重次は、六疊の座敷の狭い方の入り口の唐紙をあけて、そこで、ちよつと手をついて、「こんばんは、……」と挨拶をしてから、すぐ、「おお、さむ、」と云ひながら、部屋の中にはひつてきて、いきなり、牧と仲木がそれを挟んでさしむかひに坐つてゐた小さな長火鉢のよこに、友だちのやうな恰好でべたりと坐つた。

三重次は、小柄で、丸顔の方で、その頃もう二十歳ぐらゐであつたが、どちらかといふと愛くるしい顔だちの女であつた。特徴は、眉毛がふとくて濃く、大きな澄んだ目に何ともいへぬ愛敬があつたが、きかぬ氣らしいところがあつた。それに、まつ毛が長く、鼻が高く、うけ口であつた。それから、目をたえず急がしくしばたたく癖のやうなものがあつた。さうして、身なりも、持ち物も、地味で、目立たなかつたけれど、なかなか凝つてゐて、贅沢であつた。牧も、仲木も、どちらかといふと、口数の少ない方であつた。殊に、仲木は、一時間でも、二時間でも、殆んど全く口をきかないことがある、と云はれるほど、無口な質であつた。

それで、二人は、三重次が長火鉢の横に坐つてゐても、「や、しばらく、」とか、「や、今晚は、」とか、云つたきりで、それから、ぼつりぼつりと、三重次にあまり興味のなさうな話をきれぎれにつづけてゐた。

さういふ話が幾らか長くとぎれた時、三重次は、ふと、帯の間から葉書型の写真を取り出して、

「これ、今日、できてきましたの、」と云ひながら、まづ仲木に渡した。

仲木は、それを受けとつてちよつと眺めながら、口もとに軽い微笑をうかべて、

「ふん、いやに澄ましてゐるね、……しかし、なかなか別品だね、」と云つた。

三重次は、この仲木の言葉が終るのと殆んど同時に、それを、引つたくるやうに取つて、すぐ、牧の膝の上に、ポトンと落とすやうに置いた。

牧が、それを仲木より幾らか長く見てから、だまつて三重次に、返すと、三重次は、それを、やはり、だまつて受けとつたが、受けとるのと殆んど一しよに、

「これ、上げましょ、」と、云ふなり、その写真を、すばやく、——それこそ、目にもとまらぬ早さで、——牧の懷に、押しこむやうに差し入れた。

それは、その写真を、いきなり、ふいに、懷に差し入れられた牧も、その有り様を側でちらと見た仲木さへも、一瞬間、呆氣にとられたほどの、あツ、といふ間の、全く、実に、目にもとまらぬ、手品のやうな、見事な、早業であつた。

かういふ事があつてから半月ほど後、——二月の初めごろ——牧は、その頃から四五年まへに、片恋ひの浮き名をながしながら、夢子といふ苦者と、その夢子の住んでゐる

町とを題材にして、幾つかの小説を書いた、といふ縁のある信濃の国の上諏訪に、仲木をさそつて出かけた。

その温泉町に、四五日ほど滞在してゐた間の或る日の晩、仲木は、その土地の名勝絵葉書を取りよせて、氷はもう解けたけれど、まだ凍つてゐるやうに見える、湖水の方を眺めながら、「あの三重次といふ女の内の向かひに、風呂屋があつたね、……何と云ふ名前だつたか、君、知つてゐるか、」と牧に聞いた。「さあ、……風呂屋があつたことは、僕も、覚えてゐるけれど、名前などは、……」と牧が云ふと、仲木は、ちよつと首をひねつてゐたが、やがて、『東京市なになに区なにがし町なんとか湯（たから屋の名を忘れまし）の筋向かひ「新住の江」うち、三重次さま』と書いてから、牧に、「君、なにか、書けよ、」と云つた。それで、牧が、「仲木とここに來ました、もう二三日ここにゐるつもりです、」と書くと、仲木はその牧の文句の横に、「勇氣があつたら、出かけてこい、」と書き添へた。

それから二三日のち、二人は、上諏訪を引あげ、それぞれ自分の家に歸つた。

牧は、その頃、さきに述べたやうに、四五年まへから小説その他の文章を書き出してゐたから、いはゆる新進作家といはれる時期もとほりこしてゐたので、方方の雑誌社や新聞社などから、断りきれないくらゐ小説その他の文章をたのまれるので、東京に歸るとすぐそれらの仕事におはれ

て、散歩にも出られないほど、忙がしかつた。

しかし、仲木は、(仲木も、)やはり、四五年まへ頃から、我流の、無謀な、出版事業のやうな仕事をはじめてゐた。が、その時分は、仲木は、さういふ仕事も、見たところ、ちよつと中止してゐるやうに思はれた。

ところが、ある時、仲木は、何かの話のついでに、問はず語りのやうに、突然、牧に、

「……僕は、小説などを書くまへに、……この一二年は、ちよつと失敗してゐるけれど、どうせ、『のりかかつた船』だから、やはり、当分出版をつづけるつもりだ、」といった。しかし、かういふことを云ひながら、仲木は、殆んど毎日、日が暮れると、自分の家の近くの色町に習慣のやうに出かけた。

さて、牧は、およそ『散歩』といふものをあまり好まない質であつたから、仕事が一とくぎりついた時でも、また、仕事に疲れた時でも、めつたに散歩などをしたことがない。それで、牧は、上諏訪から帰つてきてからも、やはり、散歩はしなかつたが、たまつてゐた仕事をつづけたり始めたりして、その仕事に疲れたり飽きたりすると、さういふ時は、たいてい仲木をたづねた。

牧は、いつたい早おきの方であつたから、仕事は、大かた、主に午前ちゆうにして、午後は、たいてい日の暮れる前ごろに止めることに略きめてゐた。

ところが、仲木は、牧と反対で、日のある間はたいてい寝てゐたので、牧は、なるべく、日の暮れ頃か日が暮れた時分に、仲木をたづねることにしてゐた。

その頃、仲木の家は、ある高台の町の、電車通りと平行してゐる、裏町の露地の奥の方にあつた。

仲木の家は、その露地のつきあたりの、二本の黒い棒が三尺ほど離れて立つてゐる門がまへの家であつた。

この黒い二本の棒の間を通つてまづすぐに二間ほど行くと玄関の入り口があるが、この家の訪問客は、たいてい、玄関の方へは行かずに、門をはひつてすぐ右側の、植ゑ木も何もない五六坪ぐらゐの庭にはひつて、その庭に面した座敷にあがる。

この部屋は、八畳ぐらゐであるが、中には何にもおいてなくて、部屋の真中よりすこし左の方によせて、一間四方ぐらゐの箱火鉢がすてである。この火鉢は、大きさは六尺四方ぐらゐあるのに、高さは一尺二三寸ほどであつた。

さて、牧が、適に、(そのうちに、ときどき、)この仲木の家に行くやうになつたのは、五月の中頃からであるから、もとより、この火鉢には火が入つてゐなかつた。五月の中頃になつても火鉢が置いてあるのは、この家では、この火鉢が一年ぢゆう来客用のテエブルのかはりになつてゐたからである。

それで、牧が、仲木がまだ寝てゐる時分に、仲木をたづねると、いつも、たいてい、三四人か四五人の先客が、この火鉢をかこんで、それぞれ、思ひ思ひのところに、坐つてゐた。

この火鉢のまはりに坐つてゐる人たちは、姿や形はさまざまであるが、たいてい、高利がし、印刷屋、製本屋、あるひは、高級の、呉服屋、小間物屋、あるひは、料理屋や茶屋の女中などである。つまり、みな、借金とりか勘定とりかである。

これらの人たちは、それぞれ、既に顔なじみになつてゐる筈であるが、殆んど口をききあふことがなく、みな、むつつきした顔をしてゐる。

しかし、そのうちに、しだいに時間がたつてくると、しきりに腕時計を眺めだす者、わざと大きな音をたてて舌つづみをうつ者、無闇に立つたり坐つたりする者、その他、それぞれ、ちがつた形で、『待ち遠しさ』を現しはじめる。

その頃になつて、やうやく、二階に寝てゐた仲木が、しづかな、殆んど聞こえないやうな、足音をたてて、梯子段をおりてくる。それから、仲木は、みなが待つてゐるその部屋にのつそりはひつてくる。

さうして、部屋の中に入つてからも、仲木は、火鉢のまはりにひかへてゐる二三人の借金とりたちに、<sup>ひ</sup>「一言の挨拶もしないで、庭と反対側の、火鉢のむかう側に、悠然と坐る。それから、牧の方に向かつて、「やあ」と云ふ。

それから、仲木は、シガレット・ケイスからゆつくり煙草を一本抜きだし、ゆつくり吸ひ、それを吸ひをはると、また、ゆつくり、一本、シガレット・ケイスから抜きだし、ゆつくり吹かす。

そこで、借金とりたちの中の一人が、頼むやうに手をもみながら、借金の催促をする。しかし、仲木は、そしらぬ顔をして、あひかはらず、ゆつくり、ゆつくり、煙草を吸ひながら、一言も返事をしない。

そこで、堪りかねたらしい一人が、「仲木さん、それぢや、あんまりだ、……何とかしてくれませんか、」と少しきつい調子で云ふ。

すると、仲木は、はじめて、やうやく口を開いて、持ち前のひくい声で、ゆつくり、「できたら、はらふ、……が、今は、ない、」と、やはり無表情な顔をして云ふ。

それで、借金とりたちは、仕方がないので、くちぐちに、「では、よろしく、」と云ひながら、しぶしぶ帰つて行く。

「うん、」と、仲木は大様にうなづく。

さうして、借金とりたちがそれぞれ出て行つてしまふと、仲木は、やはり、おなじ無表情な顔を牧の方に、むけて、いきなり、「出ようか、」と云ふ。「うん、」と答へて、牧もすぐ立ちあがる。

それから、二人が出かけてゆくのは、たいてい、仲木の家からゆつくり歩いても五六分ぐらゐるところにある、色町の『とんぼ』といふ茶屋であつた。

さて、仲木が、その頃、殆んど毎日のやうに『とんぼ』に出かけたのは、一竜といふ芸者にただ逢ふためであつた。しかも、仲木が、その一竜を、はじめて見たのは、（見そめたのは、）その一竜の写真であつた。しかも、それは、その頃から四五年ほど前の『サンデー毎日』の表紙に出たものである。

それは、表紙の全面が、殆んど海の図で、その下の方に少し海岸が見え、その海ばたの、向かつて幾らか左によつたところに、滝子（のちの『』が立つてゐる写真である。）の姿が、表紙の縦の七割ぐらゐをとつてゐて、その滝子の顔のへんから斜め右の少し上の方に、ちやうどまるい形の額にはまつてゐる肖像画のやうに、まるい線にかこまれた、若い、美しい、西洋人の顔が、（顔だけが、）大きく、うつされた、写真が出てゐるのである。

それは、その時の『サンデー毎日』の記事や読み物のなかで、一番の呼び物であつた、いはゆる実録の恋愛物語の男女の主人公の姿を、殊更に読者の目をひくために、わざわざその二人の写真を表紙に出したものである。さうして、その男は、デンマルクの、ウィルヘルムといふ、裕福な、青年の、画家であり、その女は、その頃、伊予の松山で、松山第一の美妓とうたはれた、滝子（そのときの芸名は『小竜』である。）である。さうして、その時の『恋愛物語』といふのは、そのウィルヘルムが小滝をふかく愛し、小滝も亦ウィルヘルムに心をひ

かれ、結局、二人は相思の仲になつた、ところが、こんど、どうしても、ウィルヘルムがデンマルクに帰らねばならぬことになつたので、小滝はウィルヘルムと一しよにデンマルクにゆく、といふやうな筋である。（ところが、小滝は、この『恋愛物語』が出た頃は、もうデンマルク行きは思ひとまつてゐた。）

滝子は、背が、ほそ長く見えるほど高く、すらりとしてゐた、さうして、顔は面長で、目は切れ長で、鼻は細くて高く、口は、唇がうすく、小さかつたから、まづいはゆる美人の型であつた。が、その顔には、特徴があるやうで特徴が殆んどなく、どうかすると俳優が女形によそはつた顔のやうな観がすることもある。それに、知識的なところが全くなく、それでゐて、いはゆる女らしい『色気』のやうなもの、殆んど感じられない。

しかし、仲木はその写真の小滝にいたく目をひかれたのである。

それで、仲木は、いつかの上諏訪の旅から帰つて一と月ほど後、近くの神社の縁日にうさはらしに一人で出かけた時、ふと、人ごみの中に小滝らしい女を見出したので、すぐその女の跡をつけた。

さうして、仲木は、その女が神社の近くの色町のなかの『とうざい』といふ料理屋の中にはひるのを見とどけた。

そこで、仲木は、早速、その『とうざい』の近くの茶屋にとびこんで、今さき、その『とうざい』にはひつた女が

滝子であることをたしかめた、さうして、その滝子について、つぎのやうな事をつきとめた。

滝子は、三四年まへに伊予の松山から東京に出てきて、やはり芸者になつて、二三の土地を転転した。さうして、現在は『とうざい』のお上であるけれど、今やつてゐる『とうざい』は、だいぶ前から立ちゆかなくなつてゐるので、近いうちに廃業して、それから、又この土地で芸者に出るつもりである。

これだけの事がわかると、仲木は、滝子が芸者に出る日を、心ををどらせながら待ちうけた。

それで、滝子が、いよいよ『とうざい』を廃業して、こんどは、一竜といふ芸名で、おなじ土地から芸者に出ると、仲木は、それから、殆んど毎晩ほどその町の『とんぼ』といふ茶屋に通ひつづけた。

つまり、牧が仲木をたづねた時、仲木が、借金とりたちを体よく帰してから、「出ようか」と云ひ、「うん、」と牧が答へて、それから、二人で一しよに出かけて行つたのは、この『とんぼ』である。

ざつと、こんな風にして、二人は、いつからともなく、一しよに、『とんぼ』に行くやうになつた。さうして、初めの間は、たいてい一竜だけが来たが、そのうちに三重次も来るやうになつた。

ところが、そのうちに、三重次は、此方から別にかへもしないのに、「この内に、ゐましたから、……」と、断り

ながらはひつてきたり、やがて、いつとなく、一竜より三重次の方が早く来るやうになつた。

さういふ事のあつた或る時、仲木が、冗談のやうに、三重次に、「かつてに、やつて来たときは、花代も何も払はないよ、」と云ふと、三重次は、言下に、「そんなもの、あたしが、払ひます、」と云つた。

あるとき、女たちがまだ現れない前に、二人は、『とんぼ』の座敷の縁側にならんで、庭の方を眺めながら、ぼつりぼつりと話をかはしてゐた。しかし、二人とも、前に述べたやうに、無口の方であつたから、五分ぐらゐも話の跡絶えることも稀ではない。さういふ時、仲木は、ひどいときは、十分以上も、何も云はずに、顎をなでる癖がある。

その時も、仲木は、例のやうに十分ぐらゐも無言で顎をなでてゐたが、突然、

「君……僕は、女房にわかれて、当分、四国に行かうかと思つてゐる、……四国の南の端に、日本で一ばん物価の安いところがある。……そこへ行つて、しばらく小学校の教員でもしようかと思ふんだ、……そこなら、一と月、八円ぐらゐで暮らせるさうだ。……僕は、十三年まへに、大和の十津川で、代用教員をやつたことがある、」と、ぼつんと、云つた。

「ふうんむ、……僕も、河内の若江で……中学校を出てすぐだから、やはり、十三年まへに、代用教員を二た月ぐ

らゐやつたことがある……僕は、その時、月給、十四円だつたが、君は、幾らだつた、」と牧が云ふと、「僕は、十三円だ、」と、例のやうに、ぼそりと云つてから、「……若江は、木村長門守が、討ち死にしたところだね、……おもしろいね、僕のゐた十津川は、天誅組のとほつたところだから、……」と、仲木が、云つた。

「君は、妙な物識だね、」と牧が云ふと、

「うん、僕は、歴史では、日本では、えらいんだよ、」と、仲木は、やはり、ぼつんと云つた。

ある時、三重次が、『とんぼ』の廊下で、突然、牧に、「ちよつと、」と呼びかけて、「これから、お一人で、いらつしやいませんか、」と云つた。

牧がちよつと答へにつまつてゐると、小柄な三重次が、背のびをしなげに、牧の耳のそばで、

「ここが、お否でしたら、どこか、ほかの内になさいませんか、」と云つた。

そこで、牧が、しばらくしてから、「……さうだね、なるべく、はひるのに人の目にたない家があれば、……」といふと、三重次は、ちよつと首をかしげてゐたが、すぐ、『なにがし』さんのお屋敷の横町、ご存じでせう、……あそこは、片側が真暗で、片側は、お茶屋町になつてゐますから、はひりいいでせう、……ええ、『ナニガシ』さんのお屋敷の角の、塀のなかに、大きな銀杏の木があるでせう。

……ええ、あの角から、ひい、ふう、三軒めに、『夢の家』といふ内がありますから、……」といつた。

牧は、この三重次の言葉にひきずられたやうな形で、その時から二三日のちに、思ひきつて、その『夢の家』に、行つた。

この『夢の家』は、妙な形の家で、入り口をはひると、すぐ玄関から左手に階段になつてゐて、それが三階まで通じてゐたので、外から見ると、その三階は、ちよつと塔のやうに見えた。

牧がはじめてその茶屋にゆくと、既にその玄関のところで待ちうけてゐた三重次が、「おもしろい、変つた、内でせう、」と云ひながら、すぐ牧をその三階の部屋に案内した。

この時から、牧は、やはり、三重次に引きずられるやうな形で、殆んど毎晩ほどこの『夢の家』に通つた。

三重次はときどき牧を散歩にさそつた。『夢の家』から二三町ほど行くと、小公園があつた。二人が散歩するところはその小公園であつた。既に初夏をすぎてゐたので、もう暑かつたが、この初夏の夜の二三町ほどあるく道は涼しかった。

この樹木にかこまれた小公園の中に、遊動円木があつた。三重次は、その遊動円木にのることを牧にすすめた。が、かういふ遊戯は下手であつたから、牧はことわつた。

ところが、三重次は、おどろくほどこの遊戯が上手であ

つた。最初の時、牧が、目をみはつて、思はず、

「君は、どうして、そんなにうまいんだ、」と云ふと、

「あたし、……小さい時分から踊りをならひましたから、

……」と、三重次は、動く丸い棒の上を拍子をつけて歩きながら、やうやく聞きとれるほどの声で、云つた。

その年の五月ごろ、牧は、仕事をするために、本郷の菊坂にあつた、『高台ホテル』といふ高等下宿の一室をかりて、上野のナニナニ町にあつた自分の家から、毎日、朝飯をすまずと、その高台ホテルに出かけた。

ある日、午前十時ごろ、牧が、上野の広小路の角をまがると、思ひがけなく、別の角をまがつて歩いてくる三重次に出あつた。「どこへ行くの、」と牧が云ふと、三重次は、「踊りのお師匠さんところへ、……」と云ひながら、牧とならんで、歩きつづけた。小柄であるのに、長身の牧と同じくらの早さで、三重次は歩いた。

さうして、歩きながら、三重次が、こんどは、牧に、「どこへいらつしやるんです、」と聞くので、牧は、やはり、足ばやに歩きながら、菊坂の高台ホテルに毎日かよつてゐる、といふことを話した。

すると、三重次は、その高台ホテルのある町と場所をくどいほど委しく聞き、聞きをはると、すぐ、「あたし、……この、……」と右の方を指さしながら、「池の端の傍の、お師匠さんとこへ、一日おきに通つてゐますから、その帰

りに、お寄りしてもいい、」と云つた。その云ひ方は、牧によいともわるいとも云はせないやうな、何かおつかふせるやうな調子があつた。

はたして、三重次は、それから二三日のち、池の端の名物といはれる何とか屋のいならずしを持つて、高台ホテルの牧の借りてゐる部屋に現れた。

それが始まりで、それから、三重次はしばしば高台ホテルの牧の部屋をたづねてくるやうになつた。

その頃から、牧は、仕事がおそくなつた時、あるひは仕事の都合で、高台ホテルから、自分の家に帰らないで、ときどき『夢の家』に出かけた。

ある時、夢の家で二人が逢つてゐた時、何かの話の途中で、突然、三重次が、「先生、……これから、かういふ内のお払ひ……変ですけど、半分づつ出しあふことにしてください、……」と云つた。「それは……」と、牧は、わざと明かりを消した座敷のなかで、顔をあからめながら、云つたが、かういふ話があつてから、三重次は、牧が一度だまつて払ふと、そのつぎは、牧の知らぬまに自分で払つてしまつたり、しまひには、牧の知らぬ間に、払つてしまつたりするやうになつた。

かういふ事が始まつたのと殆んどおなじ頃、ある日、三重次は、高台ホテルの牧の部屋に來た時、云ひにくさうに、「先生、このお部屋に、もつと、色んなお道具をおきませ

う、」と云つた。が、この言葉の意味がよくわからなかつたので、「なに、」と牧が聞きかへすと、「それは……おまかせくだらない、……悪いかしら、」と、めづらしく、三重次は、ちよつときまりわるさうな顔をして、云つた。

しかし、その日から二三日後あたりから、一と月ほどの間に、高台ホテルの牧の借りてゐる八畳の部屋に、意気な、長火鉢、茶簞笥、炭取り、その他が、一日おきか三日おきぐらゐに、仲町の何とかいふ名題の道具屋から、はこばれた。それから、又、同じ頃、贅沢な大形の座蒲団が大小二枚、丹前、その他が、とどけられた。

その頃、夜、牧が、ある坂の上で電車をおりて、夢の家に行くために、広い大きな通りを、歩いてゆくと、その道は南にむかつてゐたので、野原で見るやうに、大きく見える夏の空の真正面に、蛇つかひ星座が、ながめられた。あらゆる星座の中で、もつとも巨大であると云はれてゐるこの星座は、夏の南の空を殆んど占めてゐるので、（それは、その東側と西側にある、蛇つかひ星座と一しよに見えるので）実に見事であつた。

その蛇つかひ星座のうちの、ちやうど蛇の頭のあるへんに、むかし大名であつたナニガシの屋敷の角の塀の中に立つてゐる、そのへんの人たちに、『おばけ銀杏』と呼ばれてゐる、大きな背の高い銀杏の木が、三本、夏の夜空を背景にして、聳えてゐた。

その年、三重次は、二十一歳であつたが、抱への芸者を三人おいてゐた、つまり、芸者をしながら、芸者屋をもしてゐたのである。さうして、三重次は、その頃、（その前から）『月給さん』とよんでゐる檀那をもつてゐた。

『月給さん』といふのは、その檀那から、毎月、月給のやうに金をもらつてゐたからである。

その『月給さん』とよばれる檀那は、その頃まだ三十一二歳であつたが、ある大きな坂の下の町の角で、「ながはま」といふ看板をかけて、呉服を主にした小規模な百貨店のやうなものを経営してゐた。これは、百貨店の品物より、ずつと安く売り、氣がるに買へるやうにしたので、たいへん繁昌した。その上、「ながはま」は、いはゆる通信販売をしてゐたので、その方でも、（あるひは、その方が、）ずつと利益があつた。それから「ながはま」といふ屋号をつけたのは、『月給さん』は、近江の長浜の生まれであるからである、つまり、近畿地方で「近江商人、伊勢乞食」といふ諺のやうなものがあるが、つまり、『月給さん』は、その「近江商人」の一人である。

三重次は、この『土地』で出る前に、よその土地で半年あまり半玉で出てゐたが、この土地が開けはじめた頃から、この土地で芸者屋をしてゐる伯母の家に引きとられて、その伯母の家から、芸者に出た。さうして、その伯母の家

『住江』で、三重次は、二三年ほど芸者をしてゐたが、そのうちに、伯母の目ききで、その「ながはま」の主人を、檀那に持たされた。それとともに、三重次は、伯母から、伯母の家の屋号である『住の江』といふのをもらつて、『新住の江』といふ看板を出して、芸者屋になつた。(三重次は、よく、口ぐせのやうに、「あたしは、こはい人は一人もありませんけれど、伯母だけは、こはい、」と云つてゐた。)

さて、三重次は、この檀那がきらひであつたので、この檀那とは、この土地で逢ふことをかたく断り、逢ふ時は、かならずよその土地の料理屋ときめてゐた。それから、この檀那がとまる時は、三重次のぞみで、箱根の塔の沢の『ソレガシ』旅館ときめてゐた。

そのソレガシ旅館にゆくと、この檀那は、通信販売の文案を書くことにしてゐた。ところが、その文案をつくるのに、たいへん時間がかかるので、その間、三重次は、いつも、湯本まで出かけて、湯本の温泉町を散歩することにしてゐた。

三重次は、ときどき、きれぎれに、かういふ話をしたが、或る時、牧に、「一べん、一と晩どまりの旅行ぐらゐ、ご一しよにしたいと思ふのですが……あたし、『月給さん』などは平気ですけれど、……なにぶん、伯母が恐いものですから、ひと晩あけられるのは、『お酉さん』の時だけですから、……」と云つた。

しかし、牧には、この『お酉さん』の時だけ」といふ言葉の意味が、どうしてもよくわからなかつた。さうして、ずつと後に、これは、『お酉さん』の晩だけは、かういふ土地の人たちは、夜をとほして、その鵜神社におまゐりをする習慣があるので、それを利用する、といふ意味であることを知つた。

## 二

九月一日の昼ごろ、牧は、上野のナニナニ町の自分の家にゐた。

朝のうちから、妙に、蒸し暑い日であつたが、十時頃に十分あまり俄雨がふつた。

正午すこし前ごろ、牧は、下の座敷で、本棚からいろいろな本を抜き出しながら、調べものをしてゐた。

その時、とつぜん、ガラス障子が、大風に吹かれるやうな音がして、はげしく揺れた。それと殆んど同時に、体を上下左右にゆすられたので、牧は、はじめて、これは可なりひどい地震だ、と思つたので、飛ぶやうに階段をのぼつて二階にあがつた。

この時の大地震は、たいていの人に知られてゐるやうに、東京市内は、地震のためにはそれほど大きな損害はなかつたけれど、地震のためにおこつた火事のために、三分の二ぐらゐ焼けてしまつた。